

高齢犬 認知症の影

人間の50歳ほどに当たる8歳以上の飼犬の約20%に、アルツハイマー病に似た認知症（認知障害症候群）が疑われる行動がみられることが、日本獣医生命科学大獣医学部（東京）の入交真巳講師の調査で分かった。今後発症が懸念される「予備軍」も半数に達していた。

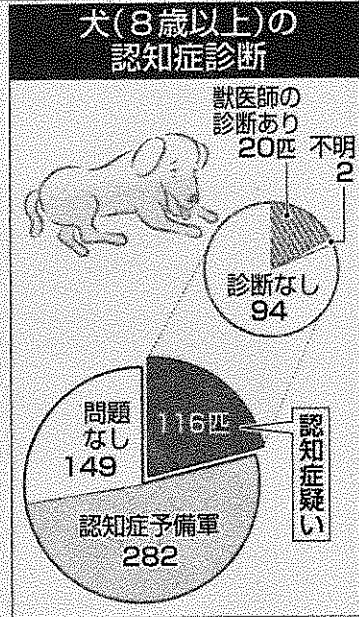
全国の動物病院やドッグランを利用した飼い主に症状の有無をアンケート。疑い例のうち獣医師が診断したケースは17%にとどまり、症状が進んで夜間にほえたり攻撃性が高まったりしても飼い主が適切に対処できていない可能性がある。

「早めに相談を」

「早めに専門の獣医師に相談してほしい」と話している。

昨年と今年に961匹の飼い主に「睡眠のリズム」「排泄行動」「飼い主などへの反応」など10項目を質問票で尋ねた。同大学院生の石井綾乃さんが回答を点数化して分析すると、8歳以上の547匹のうち116匹（21%）が「認知症疑い」、282匹（52%）が「予備軍」だった。

20%発症疑い
半数が予備軍



過去の研究で「柴犬は認知症になりやすい」と指摘されているが、柴犬を含む上位5犬種を比較したところ、柴犬の平均点は高めだったが、4種とのほっきりとした違いはみられなかった。

重い認知症の犬は鎮静剤や麻酔薬で症状を抑えるしかない。入交さんは「予備軍や症状が軽いうちに、運動やゲームで脳に刺激を与え、脳の老化を防ぐ働きがある専用のドッグフードなどを与えることで大きく改善する例もある」と話している。